

土木に賭けた夢

平清盛の音戸の瀬戸開削と大輪田泊(神戸港)建設

建設産業史家
菊岡 俱也

プロローグ

本年の大河ドラマは「義経」である。

そのはじめの頃の場面に渡哲也演じる平清盛が福原の都について幼い義経に語る場面があった。そう、清盛は都づくりとともに港も建設したのである。

今回は平清盛をめぐる土木に賭けた夢を書こう。ただ古い時代のことでもあり平清盛がやったかどうかについては疑問もあり、それらについても触れよう。

平氏の出現と六波羅政権まで

そもそも「平」という名前は、平安時代初期の皇族賜姓で誕生した姓だ。

皇族賜姓とは、天皇の一門が臣籍に降下するときに皇族が賜わった姓で、桓武天皇の曾孫の高望王が平朝臣の姓を授けられて臣籍に下ったのが、桓武平氏のルーツ。

高望王の子孫たちは関東で勢力を伸張したが、所領の相続問題などから、一族の間に平将門の乱や平忠常の乱などの紛争も生じた。将門の乱の平定に功績があった平貞盛の子の維衛は、伊勢・伊賀に進出しそこに本拠を置いて伊勢平氏として勢力を伸ばした。

当時、この辺りは京都と東国の海上交通の中継点に位置し、東国の平氏一門が伊勢で勢力を持つようになったのは海上交通路と縁が深い。

関東ではなしとげられない政権獲得への夢が伊勢進出により果たされる。

維衛の子孫にはいずれも政権獲得への野心を持つ正盛・忠盛・清盛の三代が出た。

正盛は、白河上皇の側近に近づきのちに上皇の信

頼を得、息子の忠盛も白河上皇、鳥羽上皇の院政を支える有力な武力となって諸国の受領を歴任し彼のもとには富と勢力が蓄積された。忠盛が死んだときのある貴族の日記に「数国の吏を経て、富巨万を累ね、奴僕国に満ち、武威人にすぐ」という一節がある。武力を蓄え、財テクにも励んだ忠盛は、政界進出への夢を子に託したのである。

祖父と父が築いた巨富と勢力を背景に、中央政界をいっきに駆け上がったのが清盛で、平安時代の最末期に念願の平氏政権(六波羅政権)を打ち立てる。

清盛が自らの政権樹立に第一歩を踏み出す契機となったのは保元・平治の乱だ。

それまでは身分が低く、番兵か芸能者のひとつぐらいにしか思われていなかった「武家」が、この乱以後、にわかに地位を向上させ、清盛は平治の乱でもういっぽうの旗頭である同じ武門の源氏の勢力も一掃し、清盛はこのとき政権をたぐり寄せる感触を得た。

平氏は正盛、忠盛、清盛と三代にわたって西国の武士層や海民・水軍と主従関係を結んで彼らを家人として組織化し、また家人たちを国領や荘園の地頭に任命し、あるいは知行国主や国司を一門から任命して地方支配を強化するなどを重ねた。

平氏は海を財政基盤とし海に消えた政権

こうして清盛は1167(仁安2)年、50歳にして藤原氏以外のしかも武者の身では初めての太政大臣、従一位という天皇を補佐する最高の地位を得た。

が、この翌年清盛は大河ドラマで演じられたようににわかに大病にかかり、重体におちいる。そのな

か四歳の幼帝が退位、清盛の縁につながる八歳の高倉天皇の即位が実現した。清盛死後の政変が予想されたが、彼は奇跡的に平癒した。

以後、清盛は太政大臣を退位して出家し高倉天皇の外戚として以前にも増す勢力をふるって平安政界に君臨する。

平氏の拠点は京都の六波羅一帯である（その頃の六波羅は鴨川の東から北は五条松原、南は七条通までの広い地域である）。清盛の祖父の代ここに土地を持ち供養堂を建てたが、父の代に一門の拠点とし、清盛の代に大幅に拡張し、一族の五千二百余宇の居宅の“平氏タウン”とした。

六波羅密寺の本堂の後方にある収蔵庫のほぼ中央に鎌倉時代の作である出家後の平清盛の座像が置かれている（本頁写真）。

政権樹立後清盛は広島県呉市と倉橋島との間の音戸の瀬戸を切り開き、兵庫港の原型である大輪田泊を修築した（といわれる）。

土木学会会長を務めた竹内良夫氏の著書『港をつくる』（新潮社、1989（平成元）年）に「平清盛はとくに港づくりに積極的で、日本で初めて人工港をつくり、対外貿易を経済の柱とする政策をうちたてた（中略）源氏との対比でいつも分の悪い平氏、とりわけ清盛は権力をほしいままにした悪玉の大親分のように思われがちだ。しかし港湾の視点からみれば、彼の行った数々の土木事業は評価できるもので、新しい時代を拓いたイノベーター（革新者）であったと記したいぐらいである」と述べられている。

平氏政権の経済基盤を支えたのは受領時代に蓄えた富、荘園の領主としての収益に加えて忠盛以来の中国古代の統一王朝である宋との貿易による利益があった。

平氏は海上への強い指向を持つ政権であった。

そのことは関東から伊勢に移った平氏の拠点が海上交通の要路である伊勢であったことと関係がある。伊勢から出た平氏はその知行国を山陽・南海・北陸・東海の各道の海沿いの地域に置いた。

京都の六波羅に本拠を置いた清盛は摂津（兵庫）福原に別荘を構え、そこに大輪田泊を本格的に改修



平清盛公坐像（六波羅密寺蔵、写真提供：浅沼光晴氏）

し、それまで太宰府止まりであった宋船の内海入航を大輪田泊にも認め、後述のように対宋貿易を盛んにした。

清盛がつくった厳島神社は海中に面した宗教施設で、また平氏滅亡の舞台が壇ノ浦の海上であったことを思えば、平氏は海から起こり海を財政的基盤としそして海に消えた政権であった。

音戸の瀬戸の開削

こうして清盛は瀬戸内海航路の整備に努め、現在の呉市警固屋町と広島県安芸郡音戸町の倉橋島（ここは広島湾から東西に抜ける重要航路で船舶の往来が多いことから“瀬戸内銀座”と呼ばれている）の間にある音戸の瀬戸を開削したと伝えられている。ここを開削すれば、それまで倉橋島の南端を回っていた航路は沿岸沿いに大幅に短縮されるのである。最狭部の幅は85m、秒速1.5mの潮流の激しさが特色で、戦後1,000m級の船が通れるように改修された。1961（昭和36）年には橋長432m、路幅6.5m、水面までの高さ23.5mの上級アーチ式の音戸大橋が架けられた。また1973（昭和48）年の早瀬大橋の開通により



音戸の瀬戸（写真提供：広島県呉市商工観光部）
写真の左上には音戸大橋が、右下には清盛塚が見える



海上より大輪田泊方面を望む（写真提供：社神戸港振興協会）

能美島・江田島と結ばれた。

清盛が開削したということは文献史料などには登場してはいるが、瀬戸は平氏の実質的な所領であった安摩荘のなかにあり、海上交通の便のほか大輪田泊から厳島神社への参詣などのために平氏が工事にに関わりあったことは首肯できる。

伝説では音戸の瀬戸の開削完成は、1165（永萬元）年とされている。

工事は南北の両端に堰をつくって潮の流れを止め掘削された。岩盤の掘削方法など古代土木工法の詳細は分からないが、清盛開削が史実とすれば興味がある。

ある。平政権は宋貿易などを通じて当時の先進国である中国の土木技術を習得したのであろうか。

開削には延べ6万人を動員したといわれ、沈みかけた夕陽を清盛が扇で招き返して工事を督励したという。

呉市立音戸の瀬戸公園には扇で招き返す清盛像のほか、『新平家物語』の吉川英治文学碑があり、碑面には「君よ、今昔の感如何」とある。

大輪田泊の本格的改修



おおわだのつまり

神戸港の原型である大輪田泊の建設について『世界百科事典』（平凡社）は要領よくつぎのように記している。

「(前略) 平清盛は大輪田泊を九州の博多にかわる日宋貿易の基地にしようと企て、ほど近い福原荘に山荘をかまえて本格的改修に着手、1173年(承安3)には経島(きょうのしま)を築き、80年(治承4)には諸国雑物運上船の梶取水主に夫役を命じて石椋(いしくら)を修造し、また河内、摂津、和泉および山陽・南海道諸国より田1丁、畠2丁ごとに各1人の夫役を徴して大々的な改修に着手した。その結果、宋船が入港できるようになったが、平氏の没落後まもなく荒廃し、俊乗房重源(ちようげん)がその修理を願うほどになっていた(略)」(石田善人氏執筆)

大輪田泊は日本の歴史書に見える初めての港湾の修築という(『神戸開港百年史』1970(昭和45)年)。

清盛の修築になる大輪田泊はその位置が明確でないことから学者のなかには、清盛築造説(『平家物語』六の巻)に疑問を投げかけるひともいる。竣工年も『皇代記』『源平盛衰記』『平家物語』とそれぞれ異なる。……というようなことも前提として、以下をお読みいただきたいと思う。

神戸港は古く『日本書紀』にもみえる古代からの重要港湾である。

工事の際の人柱伝説が『平家物語』と『浪速聖書』

に見える。それはこうだ。

この地は地盤が軟弱で土石の構築物がたびたび沈下し破壊してしまう。占い師にみてもらったところ「これを鎮めるためには、石のひとつひとつに経文を書き付けて海中に投じるとともに、1町に1人、30人の人柱をたてる必要がある」とのご託宣があった。

しかし清盛はそれを許さなかった。その時、自ら名乗り出たのが、平重盛の近習、17歳の松王丸(香川の城主・田井民部の嫡男)で「自分を沈めて30人の人柱を助けてほしい」と願い出た。松王丸は、千人の僧侶が読経するなか心静かに入水した。まもなく工事は完成した。清盛(別説では当時の天皇)は、松王丸の石棺を埋めたところに一寺を建てて供養した。いまも大輪田にある経島山来迎寺(別名、築島寺)が、それという。

工事の模様は「入港する船に石材十個を積んで運ばせ投げ入れた」「沖合に三十六町を出して築いた」(『平家物語』)とある。

工事は福原遷都と一体化して進められ、空前絶後



松王丸入海の碑・墓(写真提供：経島山来迎寺(神戸市兵庫区))

の海を望む都が出現した。

大輪田泊の修築によって、それまで博多までしかこなかった宋船は、この地まで入港し、はるか地中海東部の国々の物資まで運んできた。香料、染料、薬品、宋銭、書物、銀、装飾品などが荷下ろしされ、日本の物産も中国に輸出された。

異説もあるが覇者・平清盛が開いた海のシルクロードのための開削と港づくりの夢の跡としたい。